

《特別寄稿》

岡山大学一学びの三十年

神 立 春 樹

目 次

- 1 はじめに
- 2 研究—その三十年
 - (1) 日本産業革命研究 (2) 明治文学による明治時代研究
 - (3) 明治高等教育制度研究 (4) 農書—近世農村史研究 (5) 農業集落論
- 3 研究の集約と展望
 - (1) 研究の集約 (2) 課題と展望
- 4 大学院教育
 - (1) 戦後日本の大学院
 - (2) 岡山大学における人文社会系大学院
 - (3) 大学院教育の成果
- 5 研究・教育の基盤・条件
- 6 おわりに

1 はじめに

岡山大学における1970年4月以来の私の大学教員の仕事は、停年の定めにより2000年3月をもって終了する。在職期間は1970年に着任して以来ちょうど30年間である。田山花袋の『東京の三十年』、その手本となったというアルフォンス・ドーデーの『パリの三十年』のように、30年というのは一つの大きな区切である。この30年という区切は、この間の岡山大学における大学教員としての営為を振り返り、整理するよい機会である。

ときあたかも、岡山大学は『教育と研究 岡山大学1999』を刊行した。岡山大学における教員の研究と教育の内容の現状を把握し、それを学内外に公表することを目的とした1994年の第1回目につぐ第2回目のものである。それは全教員が教育・研究活動について所定の書式にもとづいてその状況を記載する、というものである。2000年度以降にこそ活用されるものであるが、本年度をもって終了する私にとっては、いままでのとりまとめという意義づけができる。

そこには担当科目などの項目のあと、研究題目とその内容、研究業績、授業（学部）の内容とその方法、大学院生の教育、自己努力目標等、の項目がある。その担当科目の項に日本経済史・日本経済社会史論と記した後、つぎのように記した。

研究題目 (Research Subjects) とその内容

- ① 明治期における産業編成・地域編成・生活編成：明治期における産業編成についての研究（『明治期農村織物業の展開』1974年、『綿工業都市の成立』'77年共著など）、地域編成についての研究（『産業革命期における地域編成』'87年、『近代岡山県地域の都市と農村』'93年、『近代産業地域の形成』'97年 御茶の水書房）、生活編成についての研究（『明治期の庶民生活の諸相』'99年 同）という、産業・地域・生活の三編成視点から日本産業革命を究明し、近代日本経済社会史の特質の把握を試みる。
- ② 明治文学による明治時代の研究：明治文学における明治時代の農村・都市・時代相の描写を検討し、これによって①で対象とする明治という時代の把握を試みた（『明治文学における明治の時代性』'99年 御茶の水書房）。
- ③ 明治期における高等教育制度の研究：高等教育制度の展開から①で対象とする明治という時代の把握を試みる。
- ④ 近世農書の研究：文政年間の一農書について検討し（「徳山敬猛『農業子孫養育草』—原本による翻刻—」'94年など）、これを通じて近代化の歴史的な前提としての近世期における農業・農村の展開を考察する。

- ⑤ 農業集落の変貌：近代日本の基底にある農業集落の変貌を村落景観論という視点から研究し（『戦後村落景観の変貌』'91年）、農業集落変貌の歴史的意義を考察する。

研究業績（Publications）（1995～1999）

著書：上掲中のこの間の3冊の他、『大学図書館図書資料論』（'96年 御茶の水書房）
『大学の授業—岡山大学における実践の記録—』（'98年 大学教育出版）。

論文：この間に著書に結実した21論文（掲載省略）のほか、「第六高等学校・岡山医学専門学校の設立」（『文化科学研究科紀要』Ⅰ '95年）「明治三十六年度全国高等学校入学生試験状況」（『経済学会雑誌』27-1 '95年）「岡山大学の前身諸校」（同 31-2 '99年）、「徳山敬猛『農業子孫養育草控』とその成立」（同 30-1 '98年）「近世の一農書：徳山敬猛著『農業子孫養育草』の成立」ⅠⅡ（同 30-2・31-1, '98・'99年）「明治初期の蘭蓆生産」（同 27-3 '95年）「明治中期～大正期の蘭蓆生産」（同 28-3 '96年）など。この間（1995～1999年）の合計 著書5・論文33計38編（総て単著）

授業（学部）の内容とその方法（Teaching methods）：講義では、日本における資本主義経済の確立＝日本産業革命論に収斂するものとして組み立てている。授業にあたっては、研究の成果を取り入れ、講義資料には地元岡山県のものを入れるなど、具体性をもたせるように心がけている。図書館資料の活用を重視し、履修生の数により可能な場合は附属図書館における明治大正期の基本的な統計書を使用する実習的学習形態を取り入れたたりしている。（1970年度以来の学士課程の教育の経験を、上掲の『大学の授業』に取りまとめ記した。）

大学院の教育（Graduate students）

修士課程では、研究課題を設定すること、それについての修士学位に相応しい論文を作成することを目標とする。修士論文作成過程で学会での発表と修士論文の公表を課す。博士課程では、それを発展させ、博士学位論文作成を達成する。

自己努力目標（Self improvements）等

友よ

地は貧しい

僅かな収穫を得るためにも
われらは数多の種を播かねばならない
(ノヴァーリス)

以下、ここに記入したことを敷衍しつつ、研究と教育という学びの30年間を回顧し、整理しておきたい。なお、学部レベルの教育については、すでに『大学の授業—岡山大学における実践の記録—』（1998年 大学教育出版）として整理してあるので、省略する。

2 研究—その三十年

(1) 産業革命研究

日本近代経済史担当者としての私の主研究題目は①である。これをテーマとして設定し、研究に至った経緯については、『岡大広報』第83号（1994年3月）に、「私の研究—これまで・これから」というつぎのような小文に記してある。

私の研究—これまで・これから

学部も大学院も大学では一貫して農学系で学んだのになぜ経済学部のスタッフなのか？、それも農業経済論のような政策系統の科目ではなく、なぜ経済史講座の日本経済史の担当者なのか？、このようなことをよく訊ねられる。この問いかけに答えながら、私のこれまでの研究と今後について記してみよう。

学部、大学院を通じて農業経済学を専攻する学科に属していたが、それは農業経済学に関心があったことではなかった。高校時代にダンネマンの『大自然科学史』（安田徳太郎・加藤正訳）を古書で買い求めたり、折から刊行され始めた加茂儀一らによる『科学史大系』全11巻（中教出版）の一部を購入したりして、科学史のようなことを勉強したい、そのためには自然科学を学ばなければならないと思ってい

た。しかし、当時は、色覚に多少とも異常がある者に対して大学はかなり制限的で、理系では農業経済学科がそれが制約とならない数少ないところであった。このようなことから結果であったので、経済学関係の授業にはあまり積極的になれず、農業史をやることで、所期の望みをみたそうとした。やがて卒業論文の作成が頭をかすめるようになった頃、埼玉県のある家に残されていた文書に巡りあい、それと取り組むことを通じて農村史研究に入りこんでいった。江戸時代に名主をつとめたこの家の文書の多くは行政末端文書であり、この卒業研究は江戸時代の基盤である農村を見るという貴重な経験となった。

農村・農業を基盤として、そこから生ずる近代的萌芽を追究することは歴史研究の一つの重要な課題である。修士課程からは、この農村・農業を基盤として展開する農村工業史を研究することとなる。農民は農業以外のさまざまな仕事をもつが、江戸時代は余業という、何かを営業したり、副業的に何かをつくったり、農業以外の賃稼ぎをしたりして、生活を成り立たしめてきた。近代になってからも、農家のそれはいつそう広汎となった。研究対象としたのは、この農家副業としての農村家内工業の研究であった。戦前期、ことに明治期の最も広汎な農村家内工業は織物業であった。そこでこの農村に広汎に存在した織物業もやがて手織機から小型ではあるが動力織機を使用する小工場形態に移行していく。もちろん手織機での副業的なものも広汎に残存するとともに、新たに生みだされてもいった。この農村家内工業の発展は、経済史における近代産業の発展の重要なプロセスであり、まさしく経済史の主要な課題である。

初めは埼玉県の北部の利根川辺りの地域の綿織物業の研究であった。しかしここは問屋制的家内工業の形態が広汎に存続し、新しい動きを積極的にみせることが少ないところであって、この時期の小工場化という積極的展開の要因を究明する対象としては適切なものではなかった。明治期に最も発展的な様相を見せたものの一つが輸出羽二重業で、福井県や石川県が第一の産地であった。この福井県、石川県の輸出羽二重業は、農村部に基盤を置き、その農村が水田地帯であるということにおいて、農業史サイドからみた興味ある問題点であった。そこで、つぎに、この福井、

石川両県を対象とした研究を行ない、その展開がその特異な農村構造と深く関わっていることを明らかにした。『明治期農村織物業の展開』（1974年 東京大学出版会）は、これらの研究の成果を刊行したものである。

ところで、当時、日本経済史の研究動向は産業革命研究が主要な課題となっていた。私もこの研究を通じて経済史が重要な課題として設定していた産業革命研究に、はからずも関わることとなったのである。なお、当時の研究は方法論的には産業金融史的分析視角が導入され、大方がその方法によっていた。東京大学経済学部の山口和雄先生を中心とした研究会に結集した多くの大学院生による共同研究の成果は著しく、その視角からの研究成果は日本経済史の主流を形成した。私の研究はそれとは異なるアプローチの仕方による、きわめてささやかなものであった。しかし私の方法は農村構造論的視角からのものという、もう一つの方法として位置づけられているが、学問はまことに多様な視角・方法によることこそが重要である。

この私の視角・方法に産業金融史的方法を取り入れた研究を行ないたいと思い、岡山大学着任後、それを愛媛県今治地方の綿ネル業について試みた。それは地理学教室の葛西大和氏との共同研究であったが、この優れた地理学者との研究は、自然条件の重視という地域的研究における重要な問題に立ちかえった。共著『綿工業都市の成立—今治綿工業発展の歴史地理的条件—』（1977 古今書院）はその成果である。

ところで産業革命というのは、たんなる産業編成替えの問題ではない。それは、地域的な編成替え、民衆生活の編成替えの問題でもある。着任したこの岡山県という地は日本の近代化を研究する上での一つの恰好の研究対象であった。そこで日本全体の状況を意識しながら、この岡山県地域における産業・流通などの変容とそれにとまなう地域編成を検討し、その成果である多くの論文にもとづき作成したのが、『産業革命期における地域編成』（1987年 御茶の水書房）である。この書物は、近代史研究によりやくみられつつある地域史的研究の成果としての位置づけを与えられている。

人々の生活は、その程度には大小はあるが、いつの時代も変容するのであり、特に明治という時代は近代産業の発展・資本主義の成立によって大きな変化がもたら

された。一見変わらないような農村にも変化があらわれているのであり、このような都市や農村での人々の生活様式の変化を明らかにしていくという課題がある。最近上梓した『近代岡山県地域の都市と農村』（1993年 御茶の水書房）も、この一連の研究の成果を取りまとめたものである。明治期の岡山県下に生じた都市と農村の諸問題を検討したこの書は、その時代の民衆の存在状況を知るための試みとなっている。さらに、民衆の生活状況を把握するために、そのころ作成された、消費資料も含む「町村是」などの資料により、検討しつつある。それらを取りまとめて『明治期における国民経済生活』（仮題）としたい。

このように産業編成・地域編成・生活編成という三つの側面から統一的に産業革命といわれる事態、その時代相の日本の状況を検討していくということを課題としてきた。そしてこれがこれからの課題でもある。

研究の過程は、それを行なう方法を切り開く過程でもある。以上のような研究をさらに進めていくうえで、文学作品にもとづく検討を試みている。かつて研究した埼玉県の織物業の研究の対象とした場所・時代は、田山花袋の小説『田舎教師』の舞台と同一であった。さまざまな文献や買継商の帳簿の分析などによって当時の織物業についての検討を行なったが、その当時の状況を最もよく彷彿させてくれたのはこの『田舎教師』における描写であった。近年の「田山花袋『田舎教師』における北埼玉地方の農村」（『岡山大学経済学会雑誌』掲載）なる論文はそのような観点からのものであるが、このほかにこれまでに文学作品による時代描写・時代把握に関するいくつかの論文を執筆した。これらを集成して『明治文学にあらわれた明治の時代』（仮題）として取りまとめたいと思っている。

歴史研究は、現代において生じつつある諸問題の一刻も早い解決ということに直ちに応えられるというものではないが、しかし、たえずより斬新な研究課題、分析視角・方法が要請される。とはいえ個々の研究者は目まぐるしくそれに対応できるというものではない。一度設定した課題に忍耐づよく、長期にわたり取り組む。それは孤独で、厳しいが、しかしそこには新たな発見や創造がある。そこに研究の悦びがあるのである。

上の文章に記すように、学部時代は卒業研究を近世期を対象としたものであったが、修士課程からは明治期の農村工業を対象とし、具体的には農村織物業であった。折から日本経済史の主研究対象期が明治後半期のいわゆる産業革命期であったという状況にあって、私の研究もその一環に組み入れられた。

ところで産業革命研究はたんに産業編成論にとどまるのではなく、生活編成論を終局の課題とし、両者の媒介として地域編成論をたてるという構想のもとに、それらに関するものを作成しつつあった。そして、1994年の上記の文章執筆その後、そのいくつかのものを実現した。

まず、『近代産業地域の形成』（1997年）は、地域編成論として刊行した『産業革命期における地域編成』（1987年）で前提とした全国レベルについてのものである。

また、一課題とした生活編成論に関する一連のものをとりまとめて『明治期における国民経済生活』（仮題）としたいと記したが、それは昨年末に『明治期の庶民生活の諸相』（1999年）として公刊した。

この生活編成論にあたるものを出したことにより、産業編成・地域編成・生活編成の三視点からのものが一応は形となってきたといえるのである。

このようにして形は出来てきたとはいえ、いずれの分野も、そして、相互連関的にも不十分であることはいうまでもない。そして、各分野についてより深め、相互の連関を明らかにしていくことが今後の課題といえよう。

ところで、三部構成論という観点からの不十分さということでは、そもそも、農村織物業を対象とした研究は、このような構想のもとで行なったのではなく、三部構成論との連関は不十分である。したがってこの観点からの産業編成そのものの研究が必要であり、いくつかの個別産業史についての検討を行なっている。

その一つは、明治期の蘭蓆業に関するものである。

蘭草を原料とする蘭蓆は住生活に不可欠の物である。畳床に装着する

畳表、アメリカにおいて敷物として使用される花筵がそれであるが、国内需要により生産が展開する畳表の生産の量的拡大は大きくないのに対して、アメリカへの輸出の拡大によった花筵はきわめて発展的であった。この蘭筵業については地方産業の一例として早くから注目していたが、岡山大学へ着任した後に、「明治期輸出花筵業の展開過程」(『岡山大学産業経営研究会研究報告書 第6集』1973年)を作成した。その後、それをひきつづき検討することができないままであったが、やがて主要蘭筵地の一つである早島町の町史の編纂に関わることになり、この蘭筵業について再び検討することになった。『教育と研究 岡山大学1999』に記したものなどの7論文を作成したが、これらを取りまとめて、最近、『近代蘭筵業の展開』(2000年 御茶の水書房)を上梓した。

その二つめは、児島織物業史である。岡山県の児島地方の織物業はわが国の主要な産地織物業の一つである。岡山大学に着任後、それ以前の研究の延長線上で今治綿織物業地の検討を行なったが、地元の児島織物業についてはできないままでいた。やがて倉敷市の新しい市史を編纂するために設置された市史研究会に参加して、近代の産業部分を担当するなかで、『新修倉敷市史 5 近代(上編)』(2000年 倉敷市役所)の第6章第2節「綿織物業の展開」という12ページの小さいものを執筆した。ここ児島地方の織物業は産地間の競争のなかで、その主要地である南児島の機業は中国向けの帯腿子という特殊製品に特化していくが、中国でその製品の生産が展開されるなかで後退を余儀なくされ、他品種への転換もならず、行き詰ってしまい、やがてこの地域は縫製業へと転換する。このような道筋を立てたが、それを十分明らかにしていくことが課題となっている。

この織物業の織機について、織機生産についてのもの(「明治期における力織機生産の展開—最近の研究成果にもとづく一整理—」『岡山大学経済学会雑誌』第24巻第2号 1992年3月)と、織物業の展開と織機生産の関連についてのもの(「明治後期における織物業の発展と力織機生産の成立—その産業編成上の意義」同誌第23巻第3号

1991年12月)を作成した。産業資本の確立の基準においては、二部門定置説と綿工業主軸説とがあるが、前者の立場に立つ場合の問題点は、第一部門と第二部門の連結である。二部門定置説である以上はこの連関は重要である。この点について、私は織物業(第二部門)と織機生産(第一部門)の連結が重要であると考えている。この織機生産の動向の検討が課題となる。

これらは明治期における産業史の発展過程の具体的検討であり、それを通じて認識は深まるが、いずれにしても産業編成論にふさわしい産業史研究が課題である。地域編成論、生活編成論にしても然りである。

そしてここで浮かびあがる課題は、これらを統合した日本産業革命史論の作成である。

(2) 明治文学による明治時代研究

引用文に記したように、文学作品を素材とした明治期の研究は、上述の産業革命研究と深く関わり、それについての別の側面からの取りまとめであるといえるものである。そこにおいて『明治文学にあらわれた明治の時代』(仮題)として取りまとめたかったものは、『明治文学における明治の時代性』(1999年)として公刊した。

1986年2月に文学作品を素材としたものの最初のを発表して以来、8論文を作成した。素材としたのは、徳富蘆花『みゝすのたはごと』、田山花袋『田舎教師』、島崎藤村『千曲川のスケッチ』、宮崎湖処子編『抒情詩』、田山花袋『東京の三十年』、尾崎紅葉『金色夜叉』、徳富蘆花『不如帰』で、本書はこれらを取りまとめたものである。文学作品の検討を通じて明治という時代の時代的特質の把握を試みたものである。

(3) 明治高等教育制度史

③としたものは、『教育と研究 岡山大学1999』であげたものでは、「第六高等学校・岡山医学専門学校の設立」(『岡山大学文化科学研究科紀要』第1号

’95年)「明治三十六年度全国高等学校入学試験状況—旧々山口高等学校の進退窮まるをみる—」(『岡山大学経済学会雑誌』第27巻第1号 ’95年)「岡山大学の前身諸校—日本近代高等教育展開の一地域事例—」(同 第31巻—第2号 ’99年)である。

この研究は、大学に職を持つ者として自ずと大学について、その在り方について考えることと、日本近代を研究対象としていることが結びついて、課題となってきたものである。国家の統制の冠たる日本のこと、大学、ことに国立大学は文部省の枠の内、掌中にあり、国家的な秩序のもとにある。現在の99の国立大学には様々の階層・序列があり、各大学はそれに相当する位置にある。その階層・序列を乗り越えられることはあり得ない。ただ一つ例外があった。それは最古ともいえる歴史のある大学が、国家的なプロジェクトにあわせてみずから閉学して、全く異なる形の大学に転換するという事によってなされたところである。大学の序列はその大学の長の位置づけにあるのであり、この転換がもたらしたことはそれによって確認できる。しかし、この例外的なこととてもかつての地位の回復ということとの関連においてありえたことであつたともいえる。

岡山大学のこの30年間は、改組に続く改組のそれであつたが、この改組による制度整備・拡充は全国的にみると、ある「法則性」にもとづいて行なわれてきた。それは戦後改革による新制度として発足する段階での母体校の位置・格付であるが、それは明治期の国家体制確立の時点まで遡る。まさしく、近代の高等教育制度確立に遡及する問題である。

近代化過程において教育は極めて重要な問題である。近代化を一挙に進めなければならなかつた後発資本主義国日本にとっては、国家の須要の人材の養成が緊急の課題であつた。それは官僚であり、教員であり、軍人である。高等教育機関はこのような国家目的の学校として設立された。そのためのものが、帝国大学、高等師範学校、陸軍士官学校・海軍兵学校などであつた。これらの学校は、近代国家目的という意味において、フランスが先進イギリスを追いつくために設けたグラン・ゼコールという学校群に類似していると

思われる。この高等教育機関の設立と展開は日本近代史の特質を端的に表現するといえる。かくして、高等教育制度研究は明治期研究の重要な一環となるのである。

このようなことから、この岡山大学の前身諸校についての検討などによって近代日本の高等教育に関する研究を行なってきた。岡山大学が刊行した『岡山大学五十年小史』（1999年）の「第一部前身諸校」もその一環として担当した。この問題についてはなおいくつかの検討対象があるが、それらについての検討にもとづいて、『明治高等教育制度史の一考察』（仮題）としてまとめたい。それができたならば私の明治時代認識はさらに深まるであろう。

(4) 農書—近世農村史研究

『研究と教育 岡山大学1999』の研究題目の一つに④近世農書の研究：文政年間の一農書について検討し（「徳山敬猛『農業子孫養育草』—原本による翻刻—」『岡山大学経済学会雑誌』第26巻第1号'94年など）、これを通じて近代化の歴史的な前提としての近世期における農業・農村の展開を考察する、がある。この間のこれに関するものとしてあげたのは、「徳山敬猛『農業子孫養育草控』とその成立」（同第30巻第1号'98年）「近世の一農書：徳山敬猛著『農業子孫養育草』の成立」ⅠⅡ（同第30巻第2号・第31巻第1号、'98・'99年）である。このように農書研究を一研究題目としていることについて記そう。

引用した「私の研究—これまで・これから」に記したように、学部段階では近世農村史に連なる卒業研究を行なっている。現在は埼玉県幸手市に属する、当時、武州葛飾郡上吉羽村の代々名主を勤めた石塚義英家の文書にめぐり合い、それに取り組んだ。それは近世初期から後の文書が残っていた。「検地帳」の集計による村人の土地所有状況、文化期以降の「宗門人別帳」による家族構成、その石高の記載による石高別階層構成、各家ごとの変化、「年貢割付」「年貢皆済目録」による年貢収取の状況、などの検討を行なった。

当時、農業史をベースとしながら、近世・近代の社会経済史研究を切り開

いていたのは古島敏雄先生であった。畿内農村についての実証的研究の成果を、編著『寄生地主制の生成と展開』（1952年 岩波書店）、共編著『商品生産の展開と地主制』（1954年 東京大学出版会）などとして世に問われていたが、そこで行なわれたことをこの関東農村について行なってみようとした。それは無謀ともいえるべき取り組みであった。その研究は大きく進展すべくもなく、乏しい成果の一端を、後に、日本農業経済学会で発表し、それを「近世—関東農村における『共有地』分割についての一考察—貞享・寛保間にみられる分割方法の変化をめぐって—」（『白梅学園短期大学紀要』第3号 1972年）としたにとどまった。

この研究は1編の論文をその成果として公表するにとどまったが、しかし、この石塚家文書との取り組みは、江戸時代の基盤である農村をみることに通ずる貴重な経験であった。最近になって、この石塚家文書にある川除御普請所の杭木流失事件の取調べ書の写である『一件口書写』2冊なる文書を翻刻し、それをめぐる事柄を解説した「〔武州葛飾郡上吉羽村〕一件口書写 天保八酉年十二月 儀助扣」Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（『岡山大学経済学会雑誌』第28巻第3号、第29巻第1号、第31巻第2号、1996、97、99年）を発表した。当時作成したものを、いまようやく印刷に付したが、抱きつづけてきたこの石塚家文書と取り組んだことへのこだわりがなさしめたといえよう。

論文「元禄時代に於ける農学の発達とその地盤」（上・中・下）をもとにした古島敏雄先生の学位論文『日本農学史 第一巻』（1946年 日本評論社）は、いまなおそれを越えるものはなく、数多くの分野にわたる古島先生の研究足跡のなかでいまなお追従を許さないのは日本農学史・日本農業技術史の研究である、といわれている。古島先生のもとでは、莫然と、農学史を研究したいと思っていたが、明治期の農村工業史を検討することとなり、そして、やがて産業革命・産業革命期の研究を主とするものとなり、経済史研究者となった。しかし、その手法は、農業史をベースとするものであり、さらに、どこかに農業史そのものに対する関心は潜み続けていて、それがたまたま関わっ

た一農書の研究へと駆り立てていったのである。

1983（昭和56）年に完結した「日本農書全集」全35巻（農山漁村文化協会）は、江戸時代の多くの農書を翻刻し、現代語訳、注解を付して収録したものであるが、その過程で、『農業子孫養育草』もその対象となった。この書は岡山県北部、現在の真庭郡川上村の徳山敬猛の作であるが、これを私が担当することとなった。進めていく内に、それは宮崎安貞の『農業全書』の引用が多く、オリジナリティーがきわめて小さいことがわかり、除外することを提言した。結局、それはそのなかに補論として解説することにとどまった。しかしオリジナリティーが小さいとはいえその価値は別であると考え、私はその研究を行なった。これが④としたものである。

1826（文政9）年に徳山敬猛によって作成されたこの「農業子孫養育草」は、夙に世に知られている農書である。『国書総目録 第六巻』（1960年 岩波書店）には、「農業子孫養育草 のうぎょうしそんやしないぐさ ㊦徳山敬猛 ㊧文政九年 ㊨近世地方経済史料四」（468ページ）とあって、すでに小野武夫編『近世地方経済史料 第四巻』（1932年 近世地方史料刊行会）に収録されている。この書について、そこには、「文政九年丙戌六月、美作の人、徳山敬猛の著す所にして、農事の沿革概要より、麦の陽、稲の陰なるを説き、夫より種芸、節氣、分限、男女子の使用法、種糶の選択、耕作方等を記したる有用の書なり。其の父清延にも稚子遺教抄の著ありと云へり。原本は岡山県より農商務省に進達する所にして、美作国徳山村徳山馬太郎の蔵書より借写せしものに係る」（4ページ）、との解説がある。

この借写し、農商務省に進達されたこの農書は、同様に進達された他の農書とともに、関東大震災で灰塵に帰してしまうが、幸いにも農商務省に勤務していた小野武夫が1920（大正9）年から1923（大正12）年に至る間に、同省文庫に保管されていた農書類のかなりのものを筆写していたということである。『近世地方経済史料 第四巻』のものはこの小野筆写本を底本としたものである。しかし、この小野筆写本そのものは今はない。ところが、もう一

人、この農書を筆写した者がいた。それは福島県の人、初瀬川健増で、彼は1919（大正8）年に農商務省において筆写している。日本農書全集は「農業子孫養育草」をこの初瀬川健増の筆写本を底本として、翻刻・現代語訳をしようとしたのである。

この農書は、農書全集には収録されなかったが、しかしその価値は別であると考えた私は、この初瀬川健増筆写本にもとづきそれを翻刻し、あわせて『農業全書』との比較を行なった。さらにその後、徳山家より敬猛直筆の原本が姻戚関係にある家で発見されたという連絡を受けた。そこでその敬猛直筆の原本によって、再度、翻刻、『農業全書』との比較対照を行なった。

ところで、この1826（文政9）年に先立つ1824（文政7）年に敬猛は「農業子孫養育草控」という控という文字をを除けばこの年のものと類似の名称の農書を作成している。そこでこの控の翻刻と1926（文政9）年のものとの比較対照を行なった。

また、この徳山敬猛家は存続し、現在もその地に居住している。そしてこの徳山敬猛家には文書類が残され、それは「徳山家文書」として岡山大学附属図書館に所蔵されている。この文書類によって、当時の同家やその地域の状況を検討することができた。

これらのことを通じてつぎのことが明らかとなった。1824（文政7）年と1826（文政9）年とは類似の標題にもかかわらず内容的には全く異なるものである。そして1826（文政9）年のものは『農業全書』からの大幅なピックアップで成り立っている。しかし僅かではあるが独自の内容の項目があり、ピックアップの仕方とあいまって、それは独自の農書となっているといえるのである。このようなことを明らかにしている。

この時代には、少なからぬ農書が作成されている。しかし、この書のように、その著者の身許が明確で、かつ、その子孫が判明し、しかもその地に居住していること、かつその家の文書類が残され、利用できるなどという状況にあるものは稀である。その上に、2年前の同類の標題でありながら内容が異

なるものさえもあるということが加わる。これらによって農書の成立の経緯などを検討することができる稀な農書である。

なお、農書は各地で作成された。それはこの農書のように、流布していた『農業全書』をピックアップした、あるいはそれに似た、似せ農書が少なくない。しかしそこには独自のものが僅かでもつけ加わっていることや、ピックアップの仕方そのものにそれなりの工夫があるとすれば、それはある意味での創作である。しかもそれが百姓身分の者によっているものが少なくない。ここに近世期における農業・農村の変化を、その進歩・発展という側面の反映をみることができるといえよう。

かつて古島敏雄先生は、宮崎安貞の『農業全書』は、一つには、中国の農書『農政全書』に多く依拠するとともに、自らの体験によることを明らかにされたが、以後、わが国にはこの『農業全書』に依拠する多くの地方農書が現われた。この『農業子孫養育草』もまさしくその一つである。似せて書いた似せ農書であるが、その体験や地域の実情にもとづくその引用の仕方、そして僅かではあるが独自の記述のあるこのような似せ農書は、しかしまさしく一つの創作物である。このようなものが百姓身分の者によって書かれたことに、近世日本農村の特質、あるいは、その発展性をみることが出来る。

このようにしてめぐり合ったこの一農書についてのこれまでの研究成果を取りまとめて『近世の一農書の成立』（仮題）としたいと思っている。この研究によって、冒頭の引用文に記した高校の頃に抱いた志が僅かでも満たされたような思いであるが、一書とすることによって、なおそうなるであろう。そしてこの一書ができることによって、日本の近代に先立つ時代についての私の認識が深まるであろうと思っている。

(5) 農業集落論

私の一著作に、『戦後村落景観の変貌』（1991年 御茶の水書房）というものがある。『教育と研究 岡山大学1999』で研究題名の一つとしてあげた⑤農業集

落の変貌：近代日本の基底にある農業集落の変貌を村落景観論という視点から研究し、農業集落変貌の歴史的意義を考察する、という農業集落論として位置づけたものである。この景観という切り口からの農業集落の変貌についての研究は、木村礎氏の構想に基づく「日本村落史講座」（全8巻 雄山閣）の景観編の一つである『日本村落史講座第3巻 景観Ⅱ 近世・近現代』（1991年）の「戦後村落景観の変貌」という一文の執筆依頼を契機に進展したものである。

私が岡山大学に着任した1970年の頃は、新聞は連日、いわゆる過疎に関わる記事を掲載していた。近代日本に至っても日本社会の基盤でありつづけてきた農業集落が変貌・解体するという日本歴史上の大きな事態が進行しつつあった。歴史研究に携わる者としてこれに関心ではいらなかった。着任した年に、農林業センサスにもとづき、岡山県の市町村別の検討を行なうなどして、この時期の動きの激しい人口流失、農家減少が見られる町村の諸類型を見出し、農業基盤がありながら大きく揺れている村を摘出したりした。そして1971年の夏から秋にかけて、その一つの加茂川町を訪れてその典型的な地区を対象とした調査研究を行なおうとした。

この調査研究は実施できなかったが、その頃、たまたま他にその機会があり、農村調査を行なった。農林省の「農地賃貸借推進特別調査」として児島郡灘崎町の調査（1972年7・8月）、農林省の「農業集落農地動態調査」を引きついで全国農地保有合理化協会の岡山県児島郡灘崎町川張地区の同調査（1973年）である。前者の調査報告書は「岡山県児島郡灘崎町における農地移動の実態と規模拡大の展望」をタイトルとしたが、そこに示されているように規模拡大の展望の検討が課題であり、そのために川張四区的全農家20戸と西高崎地区2ha以上農家13戸を対象とする調査を行なった。集落農家の悉皆調査により階層による状況をみることと、上層農家の動きをみることという二つのことを行なった。

このように岡山大学着任当初に、農村をみる試みをし、その機会もあった

が、しかし、日本経済史の担当者としての教育と研究に忙殺されて農業集落の変貌についての検討を行なうことができなかつた。このように関心を持ちつづけながら取り組むことができないままであつたが、産業革命研究の地域編成論にあたる一書を公刊し、一息いれることができる頃であつたので、1987年の「戦後村落景観」の執筆を引き受けたのである。

そのような時、農林水産省構造改善局の「農業構造改善基礎調査」の全国10カ所調査のうちの中国四国地区のそれを担当することとなつた。1989年は岡山県賀陽町、1990年は鳥取県西伯郡名和町、1991年は高知県土佐郡土佐町であつた。これらによって農村の実態に触れることができた。なお、鳥取県名和町の調査には当時学部学生4年次生の相原克磨が参加し、調査書の執筆も行なつた。また岡山県川上郡川上町の町史編纂事業の一環として農村調査にゼミナールとして参加する機会に恵まれた。三つの集落を選び、その総ての農家を対象とする調査をゼミナール生が行ない、分担して報告書を作成したが、その編集は相原克磨が行なつた。このような経験を重ねた相原は大学院修士課程を経て、現在、農林水産省北海道農業試験場において研究に従事している。

いずれにしても、農業集落調査の分析や1989年の調査の成果などによつて、「戦後村落景観の変貌」を執筆することができた。そして、そのために行なつた農林業センサスの農業集落調査や農村調査の分析によるいくつかの論文をもとに、『戦後村落景観の変貌』という著書を出した。11ページの論文の執筆を契機に、いくつかの論文を作成し、一冊の書物を書いたことになる。

3 研究の集約と展望

(1) 研究の集約

『研究と教育 岡山大学1999』にあげた五つの研究題目の研究は、そのうちの、①と②と③は一つのまとまりとなる。すなわち、①の産業革命研究を

軸としつつ、②はそれを展開するうちに文学作品を素材としてという、別の観点・側面からのアプローチである。また、③はさらに産業革命の対象とする時期の明治という時代の、産業革命の展開による資本主義経済社会の成立とその特質についての高等教育制度面からの検討である。これらが一体となって明治という時代についての認識を深めるというものである。

これらにおいてもいくつかの問題がありながらも、とにかくこの群の研究は個別的には一応のまとまりの見通しがついたとあってよい。

研究題目の④と⑤はこれらの群のものとは異なるものである。そして、一つは近世期、一つは戦後という、およそ媒介なしには結び付かない時期のものであるこの④と⑤は、ある共通の基盤の上にある。それは農村史としてである。そして、これは、実は私が本来、強く引かれ、志していた分野である。大学院での研究成果は、『明治期農村織物業の展開』となり、産業革命研究にドッキングし、その一端を担うものとなったが、それがその後の独自の産業革命研究の始点となったのは、その後、明治期の織物業を再び追うことにし、継続したからである。しかし、元来は「近代農村工業史の基礎過程」という論題で、基礎、すなわち農村の特質との関連を問題としたものであり、農業史研究となるべきものであった。この農業史・農村史との関連ということは、以後の研究にも一貫してもちつづけていることであるが、しかし農村史そのものは閉じこもってしまった。それが、形を変えて現らわれたのが④と⑤といえる。農村史研究志向は私のなかに潜み続けていたのである。

(2) 課題と新たな展望

それぞれの箇所であげたことを完成することが、これまでの延長線上での課題である。ここではそれとは別個の新たな展望を記そう。

『戦後村落景観の変貌』を刊行した後、「中山間地域の農村景観」（『地方史研究事典』1997年 弘文堂）を執筆した。しかしこれをも含めてこれまでのものは、あくまでもこの高度成長期に一挙に進展した農業集落の変化を景観とい

う切り口から検討するという、農業集落論であったのである。

ところで、私の明治期の研究も、産業そのものから次第に時代そのものへと移行しつつあり、その方法も文学作品を通じた描写の検討ともなってきた。そこでは当時の地図や写真などという文字文献以外のものも手掛りとなり、ある種の景観観察ともいえるものとなってきた。この私の主研究題目である産業革命研究が多様化するとともに、潜んでいた農村史研究志向が、一つには江戸時代、一つには戦後という時期を対象にして現われてきている。明治期を軸としてこれらの時期を繋ぐことが新しい課題となってくるように思える。折から「近代日本の景観の変化」「現代日本の景観の変化」という二つの項目を『地方史研究の新方法』（2000年 八木書店）に執筆した。それを進めるなかで、この景観視点を上記の新しい課題と結びつけることが今後の課題として浮かびあがってきた。すなわち、この景観を軸にした日本近代史である。それはたんに近代にとどまらない、日本歴史を通ずる、少なくとも近世から近現代に至る歴史を景観を軸に把握するという、歴史認識＝「景観史学」の可能性である。この「景観史学」を追究すること、これが新たな一課題となってきたのである。

4 大学院教育

(1) 戦後日本の大学院

1970年度以来の学部レベルの教育については、それまでに執筆したいくつかの文章をまとめて『大学の授業—岡山大学における実践の記録—』（1998年）として刊行した。それ以後のものが残されているが、増補版の機会などに追録したい。ここでは大学院教育について記す。

岡山大学には医学部を除いて、大学院が長らくなかったが、このことと関連して、まず、戦後の大学における大学院について整理しておく。

戦後の1947年公布の学校教育法は、大学に大学院を置くことができると

し、1948年に新制大学12（公立1・私立11）に大学院を設置したが、国立大学には1953年12校に設置した。それは北海道・東北・東京・東京教育（現筑波）・東京工業・一橋・名古屋・京都・大阪・神戸・広島・九州で、旧帝国・商科・文理科・工業という旧制大学である。しかも旧帝国以外は、大学院は旧制部分のみで、その旧高等学校・専門学校レベルの学校の後身学部にはそれは設置されなかった。ただし、1955年に旧帝国・旧医科と東京医科歯科・徳島に医学研究科（博士課程）が設置され、以後それは1958年の弘前・信州・鳥取、と以降順次設置されていく、というように、医学部にはすべてに大学院が設置された。

1963年に至り、ようやく東京芸術・お茶の水女子・横浜国立・富山に修士課程が設置された。同時に医学部、あるいは旧制大学を母体とした学部で博士課程が設置されていた金沢に理学研究科が、広島に工学研究科が設置された。要するに新制の大学、あるいは学部で大学院が設置されはじめたのは1963年である。そして1966年に東京学芸大学に修士課程が設置され、ここにはじめて教員養成大学・学部で大学院が設置されたのである。

旧制大学を母体としない大学・学部で初めて博士課程の研究科が設置されたのは、1975年のお茶の水女子の人間文化と静岡の電子科学で、総合・独立研究科というものである。1980年神戸に文化学、1981年に奈良女子に人間文化科学、神戸に自然科学と続く。1985年には東京農工大学に博士課程連合農学研究科という、複数の大学にまたがる大学院博士課程が設置された。この年に広島大学に生物圏科学が、翌年社会科学が設置された。そして1987年に岡山・新潟・金沢に自然科学研究科が設置され、以後、千葉・熊本に自然科学、長崎に海洋生産科学が設置されていく。そして、1993年に新潟・金沢とともに岡山に人文社会系の博士課程が設置される。岡山は文化科学研究科である。

以上が国立大学における大学院の設置の推移であるが、それは、まず母体が旧制大学である大学に設置され、それ以外は修士課程も設置しなかった。

後者にはじめて修士を設置したのは1963年で、教員養成学部は1966年であった。旧制大学を母体としない大学にはじめて博士課程が設置されたのは1975年である。長期にわたり博士課程は特定の大学のみを設置されただけであるが、人部社会系についていえば、課程修了での学位授与には極めて消極的で、大学院制度は大きく歪んだままであったといえる。

(2) 岡山大学における人文社会系大学院

このような格付によって、岡山大学に文学・法学の修士課程が設置されたのは1971年、経済学のそれは1977年であり、人文社会系の博士課程は1993年であった。博士課程でいえば旧制母体の大学から40年も遅れて、しかもその形態も総合・独立というものとして、ようやく設置されたのである。

大学の大学たる所以は大学が学位授与権をもつことにある。新制度の大学の学位授与権は大学院に移された。大学院がなければ学位は授与できず、その博士課程がなければ、博士学位は授与できない。国立大学の多くは、当初は修士課程すらなく、まして博士課程は設置されなかった。スタート時、全国60余の国立大学のすべてに大学院を置くことの当否には議論のあるところであろうが、少なくともそれが大学間の格差を固定・拡大したことは間違いない。岡山大学には、いまなお人文社会系の博士課程の少ないなかで、それも設置され、大学としての形はようやく完成したのである。

(3) 大学院教育の成果

岡山大学に大学院が設置されたとはいえ、研究拠点・研究者養成としての大学院を当初から設置されていた大学とは、多くの点で異なっていた。さまざまな種類の有職者、定年退職者、留学生からなる院生を受け入れたが、いま大学院をめぐる議論されている研究者養成か高度職業人養成かというようなことに関わりなく、しっかりした課程修了論文を書くこと、それを通じて研究の方法を体得すること、これを目標にしてきた。

1977年に設置された経済学研究科修士課程では、1999年3月の3人の修了者までの17人の指導学生が修士学位を取得した。1993年4月に設置された文化科学研究科博士課程においては、最初の博士学位授与の1996年から99年3月までの間に、5人が博士学位を取得し、2000年3月までに2人、2000年度中に1人がその見込である。その学位論文題目等は付表のごとくである。

5 研究・教育の基盤・条件

このようにみえてくると、この岡山大学における30年は、大学教員としての研究と教育という仕事を、それなりにできた充実した30年であった。そのようにできた基盤・条件をあげてみよう。

第一は、この岡山大学そのものである。

いわゆる新制の、地方にある大学であるが、日本でも最多数の学部を擁する大学の一つであり、多くの専門分野の、すぐれた研究者がいるところである。多くの研究者のいることの便益は大きい。私の専門の経済史にしても、経済学部は5人のスタッフをもっている。また、私の分野と関係の深い日本史や地理学のスタッフとの交流もある。文学作品を素材とする研究も、文学関係のスタッフが購入してくれている図書を図書館でみることができる。私が研究を進めるには、このようなことが有益であった。

図書館というと、岡山大学附属図書館は全国の大学図書館でも有数のものの一つである。この附属図書館については、『大学図書館図書資料論』（1996年 御茶の水書房）において記し、また、『大学の授業—岡山大学における実践の記録—』（1998年 大学教育出版）にも記したように、学部の各種授業、大学院における指導において、附属図書館を大いに活用することができた。

第二は、研究対象の多くを岡山県に求めたことである。日本近代の地域事例的研究には岡山県は一つの格好の所である。『産業革命期における地域編成』は岡山県域を主対象とし、また『近代岡山県地域の都市と農村』、『近代

『蘭莖業の展開』はまさしくそのものである。徳山敬猛の農書も岡山県域のものである。『戦後村落景観の変貌』も岡山県についてのものに収斂している。近代史の研究の方法としては、『岡山県統計書』を駆使しており、「府県統計書」による近代史研究を切り開いたとみずから言うことができる。

地元を研究の手かかりにするということでは、図書館についても岡山大学の図書館について検討することによって、日本の大学図書館の問題と個々の図書館の問題点を知ることができるようになった。また、岡山大学という個別大学の諸問題を通じて日本の大学問題を知ることができ、また前身諸校の歴史をみることによって戦前期の高等教育制度史を知ることができた。さらに、自分の授業そのものさえも検討の対象になった。個別的事例は一般的なものに通ずるのであり、研究の手かかりは足下にいくらでもある。

第三は、地域の研究者との結びつきである。歴史の分野は、研究機関に属さない研究者が多数いる分野である。それらの人々によって学問的な拡がりや深まりがもたらされているが、大学における研究と教育においてそれらの人々との関係が重要である。私の場合その一つの、そして重要な場は岡山近代史研究会である。

1977年4月の大学院経済学研究科の発足に先立つ、その前年の1976年12月17日に岡山大学日本経済史研究会を結成し、その第1回の研究例会をもった。1990年4月25日の第100回目の研究例会の後に岡山近代史研究会に改め、以後毎月1回の研究例会をもち、2000年3月は第215回となる。この1976年12月の発足以来今日まで、ここには多くの大学院生が参加し、ここを学習の場とした。現役・元の小中高の教員ほかの職業人、退職者などで研究機関でないところで研究を続けている老若の人々が多く参加し、報告しあうこの研究会は、お互いが、そしてなによりも大学院生が多くの刺激を受けるところとなった。そしてまた、研究会参加者から大学院に入学するということにもなった。交互にここで研究報告をし、それをベースに、さらに、社会経済史学会中国四国部会、地方史研究協議会などの大会において発表するなどして

きた。大学院生の教育，学習の場として意義のある研究会である。

第四は，地方にあり，中央とは一定の長さの距離があって，間隔のあることである。分野にもよるが，私の場合は自ら設定した研究を進めていくには，中央から離れていていっこう差支えがない。めまぐるしく変る最近の状況にともすれば惑わされる，ということもなく，自ら設定したテーマでの研究を時間をかけて取り組むことができる。静に沈潜できることは非常に大きい利点である。

第五として研究発表の場としての岡山大学経済学会雑誌・研究叢書の活用である。

『岡山大学経済学会雑誌』は1969年に年4回で創刊された。私の在職期中は第2巻から第31巻で，この間の発行回数は107である。120回の筈であるが，退官記念号は合併号としてきたことによるが，そのみでなく，原稿が集まらなくて合併にしたケースが初期に少なくない。この間に投稿・掲載された雑誌回数と私の論文本数を5年期ごとに示すとつぎのようになる。

各5年度	(経済学会誌巻)	発行回数	掲載回数	掲載本数
第Ⅰ・5年期	1970～74年(第2～第6巻)	15	2	2
第Ⅱ・5年期	1975～79年(第7～第11巻)	18	9	9
第Ⅲ・5年期	1980～84年(第12～第16巻)	19	18	18
第Ⅳ・5年期	1985～89年(第17～第21巻)	18	18	18
第Ⅴ・5年期	1990～94年(第22～第26巻)	17	17	20
第Ⅵ・5年期	1995～99年(第27～第31巻)	20	20	36
合計		107	84	103

この30年間の107回の雑誌に84回誌に投稿して，掲載され，掲載論文本数は102である。連続ものを1論文とした実論文数は92である。この間の年平均で，発行回数3.6，掲載回数2.8，掲載本数3.4となる。

各5年期ごとにみると，第Ⅰ5年期は少なく，第Ⅱ5年期は発行の半分近

く、そして第Ⅲ 5 年期は 1 回だけ掲載欠で、以後はすべての 5 年期は 1 回も欠けることなく掲載している。掲載本数は第Ⅳ 5 年期までは掲載誌数と一致するが、第Ⅴ 5 年期は上回り、第Ⅵ 5 年期は 20 誌に対して 36 本を掲載している。着任当初は年に 1 回を原則とされたと言われたが、やがて連続掲載も可となり、さらに第 25 巻からはジャンルが異なれば 1 回に 2 本出してもよくなった。第Ⅴ 5 年期、第Ⅵ 5 年期の本数はそのことの反映である。

なお、第 12 巻第 4 号 (1981 年 3 月) から第 31 巻第 4 号 (2000 年 3 月) まで総てに 71 回連続して投稿し、論文 87 本が掲載された。

このように、掲載できる雑誌があればこそ、多くの論文を公表できた。そしてそれをまとめて書物とすることができた。私の書物のほとんどのものはこのようにして出来た。雑誌を十分に活用させていただいたのである。

研究成果を単行本として公刊することは、きわめて困難である。昨年末の『明治文学における明治の時代性』がその一つとして刊行された岡山大学経済学研究叢書の刊行のいきさつについては、『春の日は一田中生夫先生追悼文集一』（建部和弘・一ノ瀬篤編、1998 年 西日本法規出版）に記してある。この叢書は田中生夫先生の発案で生まれたものであるが、それを御茶の水書房から改めて刊行するという点については、私が大きく関わった。一種の自費出版である学部出版では本としてのひろがりをもたず、十分生きない。折角の学部からの刊行本を生かすために、出版社から改めて刊行して貰うことを考えて、御茶の水書房と交渉して、工夫の上で実現できた。これまでの刊行は 24 冊で、その第 4 冊目と第 24 冊目の 2 冊が私のものである。

6 おわりに

この 30 年間は私は大学のなかで生活した。住いは、着任した 2 年度目から 29 年間は大学宿舍住いであった。そのうちの 5 年ほどは鹿田キャンパス（医学部）前の街中で、津島キャンパスから離れていたが、あとは附属図書館の

裏手の宿舎などのキャンパス内、あるいは元来はキャンパスの一角であった隣接の3カ所であり、職住まじく極接近であった。附属図書館は土曜・日曜も開館、そして平日は夜間も開館し、閲覧席を書斎机代わりに活用できた。研究室は休日も終日過すことが多かった。この大学内での日常の生活の完結という得難い30年間であった。

このようにして過した岡山大学におけるこの30年、私が生み出したものはささやかなものである。結果はささやかとはいえ、しかし、この30年は大学教員としての研究と教育という仕事にうちこめた、まさしく、学びの30年であった。このように過すことができたことは、まことに有難いことであり、このことについて多くの方々感謝したい。

最後に、『教育と研究 岡山大学1999』にあげた、ノバーリスの詩を再度あげよう。これはノバーリスの著作『雑録集』の冒頭にあるものである。(『ドイツ・ロマン派全集 第2巻』1983年 国書刊行会 292ページ)。

友よ、大地は貧しい。

ささやかな収穫に恵まれんがためにも、

われわれはたくさん種を播かねばならない。

(園田宗人訳)

付表 修士・博士学位取得者論文題目一覧

修士		
1979年3月	奥 須磨子	日本資本主義成立期の都市住民構成—地方工業都市今治の事例—
1982年3月	田中 雅孝	昭和恐慌下における産業組合製糸の展開—長野県下伊奈郡の場合—
1986年3月	谷 美之 玉井 康之	1930年代の我国の造船業—船舶改善助成施設を中心として— 中国山地地域における地域複合農業の展開と発展条件
1989年3月	佐藤 雄一 徐 霖	戦前期日本資本主義経済の展開における遊廓業（岡山県） 明治後期・大正初期における農村民の生活状況—「町村是調査書」による地域比較—
1990年3月	内田 豊士	明治期における棉作の衰退—備中南部地方を中心に—
1991年3月	山口 勝則 李 振生	合織企業グループの生産構造の多角的展開に関する一考察 近代化過程における在来産業—重要輸出品としての麦稈真田を事例として—
1993年3月	相原 克磨	高度成長期以降における地域農業の担い手問題—岡山県川上郡川上町を事例として—
	有田真理子	岡山県における朝鮮人労働力についての一考察—1910～1947年
1994年3月	前田 昌義	後発地域における蚕糸業の導入と展開—近代における岡山県蚕糸業の一側面—
1996年3月	上田 賢一	近代交通網の形成にともなう地域の動向—主に湊町玉島の考察を中心として—
1997年3月	李 健	戦後日本の農地減少について
1999年3月	大塚 利昭 上廣 尚子 大川 篤志	近代イギリスにおける田園都市構想とその社会的背景について 明治期における蘭苳業の展開—岡山県早島地域の事例— 大正期における鳥取県の産業構成—第1回国勢調査を中心に—
博士		
1996年3月	森元 辰昭	近代日本における中小地主の存在形態—岡山県南地域の地主経営を中心に—
1997年3月	古川 昭	朝鮮開港後の開港地における日本人の経済活動
1999年3月	鞠 玉華 熊谷 正文 中野美智子	日本の経済発展と産業教育—中国の職業教育との比較— わが国近代漁業の地域的展開 近世史料の整理法とその利用形態の研究
博士課程在学者の学位請求論文、または学位予備論文題目		
	前田 昌義	近代における蚕糸業の展開の地域的特質—後発地域岡山県の場合—
	木村須磨子	近代日本近郊農村民の生産と消費—1918年島根県下一集落の事例を中心に—
	佐藤 正志	両大戦間期における農村社会の変容と農業

註1) 修士学位取得者のうち、谷美之、山口勝則は、重化学工業に関する論文であり、下野克己教授が主任となった。

2) なお、修士課程を就職のため退学1人（NAKANO SATOSHI）。